

# トロロープとアイルランド（2）： *The Macdermots of Ballycloran* にみる 語りの構造

藤 居 亜矢子

## はじめに

*The Macdermots of Ballycloran* (1847) (以下 *The Macdermots* と略) は、アイルランドの住人から聞いた話をイングランドの人間が書き記した、という設定になっている。そのため、その語りはアイルランド人とイングランド人というフィルターを通すことで、ある種の効果をもたらしている。この論文では語りの構造におけるふたつの立場がどのような効果を作品にもたらしているかについてみていきたい。

この作品は Anthony Trollope の第一作目の小説で、Macdermot 家の没落を描いた悲劇の物語である。Trollope がアイルランドに来たのは1841年であったが、作品自体はそれ以前の1830年代のアイルランドが舞台となっている。この作品は1843年から45年にかけて執筆された。当時の小作人たちの結婚式の様子や、地主たちの狩りや決闘の様子など、アイルランドにおける日常生活が描かれている。アイルランドに来て数年の Trollope がアイルランドの状況をよく把握していたことが窺える。

この小説はニュービー (Thomas Cautley Newby 1798-1882) によって出版される。アイルランドを主題にした小説は人気がなかった。その上、出版当時はアイルランドにおける飢饉がイングランドでも問題になっていた。そのため、この時期にアイルランドについての小説を読みたがるイングランド

の読者はほとんどいなかった。その結果，“I was sure that the book would fail, and it did fail most absolutely.”<sup>1</sup> と Trollope も失敗を予測していたように、作品は売れなかった。

まず、物語について説明しておきたい。物語は、Trollope がモデルであると思われる人物が、荒れ果てた Macdermot 家の跡地にたどり着くところから始まる。この場面には Trollope の経験が反映されている。Trollope は、友人と散歩しているときにある廃屋にたどり着いた。この廃屋を見たときに作品の着想を得た、と自伝において述べている。“We wandered about the place, suggesting to each other causes for misery we saw there, and while I was still among the ruined walls and decayed beams I fabricated the plot of *The Macdermots of Ballycloran*.”<sup>2</sup> 作品も、彼が McC—という人物から聞いた話を書き記したという設定になっている。

Macdermot 家はゲール貴族の血を引く、カトリック系地主である。一家は貧しく、建築家 Flannelly への借金に悩まされている。Flannelly が屋敷の抵当権を設定しているため、借金が返済できなければ家を追い出されることになる。Flannelly の娘婿である Keegan は Ballycloran の所有者になりたいため、一家を追い出したいと考えている。一家の長男で主人公の Thaddeus (Thady) は小作人から地代を集める日々を送っている。集めた地代は借金の返済に当てられるため、いつまでもその貧しさは改善されない。彼は借金だけでなく、妹 Euphemia (Feemy) の Ussher への恋にも頭を悩ましている。Ussher はプロテスタント教徒の警官で密造酒製造業者を取り締まっている。Feemy は Ussher に思いを寄せるが、Ussher が結婚の意思をはっきりと示さないため、Thady は二人の交流を快く思っていない。Ussher には Feemy と結婚する気はなく、転勤が決まると彼女に駆け落ちを持ちかける。Feemy は彼との結婚を期待できないと感じながらも駆け落ちに同意する。駆け落ち決行日に Ussher を待つ間、Feemy は、寒さに加えて兄に気づかれるのを恐れる余り気絶してしまう。Thady の方では妹が駆け落ちに同意していたことを知らなかった。気絶した彼女を Ussher が運ぶ場面を目撃して、彼は妹が

誘拐されるものと誤解して Ussher を殺害してしまう。Thady の宗教と反抗的な農民との関わりから、彼の Ussher 殺害は権力への反抗だと陪審員たちは考える。一方、John 神父たちカトリック教徒は、Thady が妹を守ろうとしたが故に起きた個人的な事件だと主張する。殺害時、気絶していたという Feemy の証言があれば、Thady の行動もまだ正当化できたかもしれない。その Feemy も証言直前に死亡してしまったため、Thady には有罪判決が下り、処刑されることになる。

作品は、1860年ごろ再版のため改訂される。このとき、細部の修正と3章分の省略が行われる。修正は読みやすさやイングランドの読者を意識したもので、その例として Feemy の死因を挙げることができる。Feemy は早産 (premature parturition 422) による影響のため死亡するが、再版時にその死因は省略されている。省略された章は、John 神父が Thady の弁護を依頼するため、ダブリン (Dublin) に向かう道中を描いた章、裁判の行方について話し合う章、そして物語の最終章である。最終章では、主要登場人物の後日譚が語られ、John 神父がいかに敬愛される存在であるかを述べて、共同体における彼の存在感の大きさを示す描写で終わる。Tracy は、Thady の処刑が読者に与える影響を弱めるため、Trollope がこの章を削除したのは正しい、と述べている。<sup>3</sup> そのため、この章を削除することで、読者の共感を Thady に集中させたまま効果的に物語を終わらせることが可能となる。また、Terry が指摘しているように、カトリック教徒の John 神父の存在感を小さくすることになる。<sup>4</sup> ダブリンへの旅行中の出来事は、本筋に関係ないから省略されたのかもしれない。最後の章の削除に関しては、この時すでに小説家として成功していた Trollope が読者を意識してのことだといえる。1847年版は、まだ読者を意識していない頃の Trollope が見たアイルランドの印象がそのまま描かれていることになる。

この作品にはアイルランドへの共感とイングランド人的視点、というふたつの立場が示されているが、それらの立場がどのように作品に反映され、影響を与えているのか、そして Trollope の内面がどのように Thady に反映さ

れているのか。中でも特に Trollope の内面における二重性に注目して分析していきたい。

### (1) 語りの構造と一家の設定におけるふたつの視点

まず、この作品の評価についてみておくことにする。この作品の批評には否定的なものから肯定的なものが存在している。*Critic* 誌 (1847年 May 1) ではプロットをほめているものの、「大人がこれを書いたとしたら、作家としての希望はない」と否定的な意見が述べられている。<sup>5</sup> *Athenaeum* 誌 (1847年 May 15) はまだ好意的な方だが、「暗い印象を与える」と述べている。<sup>6</sup> 一方、*John Bull* 誌 (1847年 May 22) は作品を絶賛している。登場人物の描き方には、エッジワース (Maria Edgeworth 1767-1849) やスコット (Sir Walter Scott 1771-1832) に似たものがあり、本を読み終えたとき、読者は実際にアイルランドを訪れたかのような印象を抱くだろう、と評価している。<sup>7</sup> 研究に関しても、Trollope の人気のある作品に比べると、数は少ないながらも、*The Macdermots* 単体の批評も存在している。例えば、Terry は、再版された *The Macdermots* における変更点について論じ、Johnston は保守的自由主義 (conservative liberalism) という Trollope の政治哲学と作品の関係について論じている。Tracy は、*The Macdermots* だけを扱っているわけではないが、Maria Edgeworth や Lady Morgan といったアイルランド作家と関連付けている。

作品はアイルランドの支配階級にも好評であった。Gregory<sup>8</sup> たちは “did not hesitate to call Anthony Trollope’s earliest work the best Irish story that had appeared for something like half a century.” と Escott が述べているように、<sup>9</sup> Trollope の初期の作品を絶賛していた。Isaac Butt も作品を読んでいたことが知られている。<sup>10</sup> イングランド出身の Trollope が執筆した作品を Gregory たちが好意的に評価したのは、この作品が彼らの望むアイルランド像を描いていたからではないだろうか。

Trollope は物語においてアイルランドが正当に統治されていない状況を描

いている。「彼はその状況が改善されることを望んでいる一方で、アイルランドの状況が急激な変化を遂げることに對して恐れを抱いている」、と Johnston は述べている。<sup>11</sup> Johnston の指摘にあるように、彼はあくまで現在の制度を維持し、その枠組みの中で改善をもたらしていくことを望んでいる。そのため、自分たちの地位が脅かされることを恐れるプロテスタント・アセンダンシーや併合によって利益を受ける人たちにとって、Trollope の思想は彼らの地位を脅かすものではなかった。このような Trollope の思想は作品においても示されている。

次にアイルランドとイングランドふたつの立場がどのように物語の構造において示されているかについて論じていきたい。この物語は、カトリック系アイルランドの語りをイングランド人の執筆者で囲むという、いわば「入れ子構造」になっている。

この作品は、Edgeworth と関連付けて Tracy が論じているように、<sup>12</sup> Edgeworth の『ラックレント城』(*Castle Rackrent* 1800) と共通する点がいくつかみられる。Edgeworth の *Castle Rackrent* は Thady Quirk という人物によって語られる。*The Macdermots* の主人公の名前も同じ Thady であることから、Trollope が *Castle Rackrent* を意識していることが容易に推測できる。名前以外にも共通する点がある。そのひとつが語りの構造である。この作品もカトリック教徒の語りをプロテスタント教徒の編集者の編集で囲むという「入れ子構造」になっている。その結果、作品はふたつの視点を備えることになる。イーグルトンは『『ラックレント城』における編集者は、脚注や用語解説という形でサディの混乱したアイルランド的言説を制御し調整している」、と述べている。<sup>13</sup> *The Macdermots* の場合もアイルランドの語りを英語で語り直すことは、イングランドによるアイルランドの制御もしくは改編とみることができる。「この物語は現地人の語りを部外者が書き記したという形になっている。異なる現地人の McC—のほうに物語をうまく話せるかもしれないが、彼では出来事に近すぎて必要な客観性を得られないことを Trollope は示唆している」、と Tracy が指摘しているように、<sup>14</sup> 現地人だけ

ではアイルランドの視点に偏りがちになってしまうところを、執筆者というイングランドの視点を加えることで、Trollope はバランスを取ろうとしている。この点においてもアイルランドへの共感とイングランド人的視点への配慮というふたつの立場をみることができる。

もうひとつ *Castle Rackrent* と共通する点がある。それは、登場人物の曖昧な立場である。*Castle Rackrent* の Thady に関して、イーグルトンが、「召使いは、主人の私事に精通していると同時に、慎ましく周縁に身をおいている。」と述べているように、<sup>15</sup> 彼は召使いとしては地主にとって他者であるが、執事として主人の事情をよく知っているという点において内部の人間でもある。このように、彼は地主と被支配者、両方の状況を知ることができる立場にいることになる。このような立場は、Trollope や Thady とも共通するものである。

二重性は、Macdermot 家と Thady の設定に当てはまる。まず、ここでは、一家の設定についてみていきたい。この物語は、アイルランド小説によくある、地主の没落を描くビッグ・ハウス小説の形式を採用している。「重要なのは、Trollope が破滅する運命にあるカトリック一家の息子を主人公に設定したことだ」と Cronin が述べているように、<sup>16</sup> ビッグ・ハウス小説はたいがいプロテスタント系の一族を扱うが、この作品はカトリック系ゲール貴族の末裔を主人公に設定している。当時カトリック系の地主は珍しかったが、アイルランドの人口の大半はカトリック教徒であった。アイルランドはカトリック教徒、イングランドはプロテスタント教徒のイメージがあった。そのため、カトリック教徒に設定することで、一家にはアイルランドのイメージが重なる。その結果、一家を取り巻く状況と苦難は、アイルランドを取り巻く状況に重ねられている。

「一家は、宗教と貧しさによって地主社会から阻害され、階級によって農民からも阻害される、二重に周縁的な存在である」と Tracy は指摘している。<sup>17</sup> このように、一家は地主であるのにカトリック教徒で貧しいという点で、同じ地主たちからは仲間としてみなされず、他の地主と交流することは

ない。経済面では小作人たちと変わらないが、階級の違いから彼らの主人とみなされている。そのため、一家は地主と小作人両方の間を揺れ動く立場に  
いることになる。

アイルランドはイングランドと併合しているため、他の植民地より高い地位に  
いるが、その一方で決してイングランドと対等な関係にはなれない。この曖昧な立場  
において、一家とアイルランドの姿は重なる。

Trollope は滅びつつある一家を同情的に描いている。「Trollope は, Macdermot 家の没落を10年前の自分の家庭の崩壊と重ね合わせているのかもしれない」<sup>18</sup> と Overton が述べているように、過去の Trollope 家と Macdermot 家の境遇には重なる部分がある。Trollope の父トマス (Thomas Anthony Trollope 1774-1835) は法廷弁護士として失敗した後、土地を借りて農場を運営しようとするが失敗する。最後には借金のため、危うく逮捕されそうになる。この出来事は Larry が借金のために逮捕されそうになる場面に反映されている。両者とも財政状態が悪化するにつれ、精神的、肉体的健康も悪化していく。Trollope 家では、父に代わり、母親が作家として生計を立て、一家を破滅から救おうとしていた。Trollope の場合と異なり、Macdermot 家には破滅を避ける未来を創り出せる存在はいない。一家の破滅は冒頭における屋敷の姿に見られるように、すでに決定している。過去の自分の家庭と重なる部分もあるため、Trollope は一家に対して同情的な態度を示している。

Trollope は一家にただ同情を示すのではない。一家の貧困の原因には一家にも問題があることを示している。現在、一家は借金に悩まされ、貧しい生活を送っているが、その原因は Thady の曾祖父の時代にまでさかのぼる。その経緯を以下に述べておく。Thady の曾祖父は次男が無一文になることを嫌い、土地を分割して残そうとする。この頃はまだカトリック教徒は刑罰法 (the Penal Laws) によって職業、私有財産の所有など様々な点において制約を受けていた。法律の網をくぐり、“about six hundred as bad acres as a gentleman might wish to call his own.” (5) という収入の見込みがない土地を残す。次男 Thady (主人公の名前は祖父に由来) は地主にふさわしい生活を送

るために、“the descendant of a Connaught Prince” (5) にふさわしい屋敷の建築を依頼する。その屋敷は“it was ill-built, half finished” (5) であった。やがて彼は訴訟や借金の取立てが重なり、若くして亡くなる。その息子 Larry の頃に、屋敷の抵当権は建築家 Flannelly のものになる。Flannelly は自分の娘との結婚を提案するが、“the blood of the Macdermots could not mix with the lime and water that flowed in a builder’s veins; he therefore made an enemy where he most wanted a friend [...]” (6) と血統に対するプライドから結婚を拒否し、Flannelly を敵に回すことになる。こうして、Larry の息子で主人公の Thady は借金を返済するため、貧しい小作人たちから地代を取り立てる日々を送るようになった。屋敷の抵当権は彼に奪われているため、借金が払えなければ、家を追い出されてしまうことになる。この姿は地代が払えなければ地主に追い出されてしまう小作人の姿が重なる。取り立てた地代の大半は借金返済に消えるため、一家は土地を改良するだけの余裕がない。そのため、一家だけでなく、小作人たちも貧しい状態から抜け出せないでいる。過去からの様々な状況が絡み合い、現在の問題を解決できないでいる一家の姿はアイルランドと重ねあわされている。“Oh, had he but then condescended to have married the builder’s daughter, he would not now have been the builder’s slave.” (9) と述べられているように、血統を重視して建築家の娘と結婚していれば、現在の借金に悩まされることもなかった。一家の現在の苦悩は地主としての体面の維持や血統へのプライドが主な原因で、カトリック教徒であることは特に関係がないものとして描かれている。Larry のプライドが一家の、特に Thady の苦難を深めていく例は他にも描かれる。Keegan は、今、Ballycloran の土地を売れば、借金を帳消しにするだけでなく、一家にも生活手当てを与えることを提案する。Thady は無一文で追い出されるよりはこの提案を受け入れたほうがよいと考える。Larry はこの提案を拒否するだけでなく、Thady のことを Keegan と共謀して自分を追い出そうとする裏切り者だとのしる。ここでも Larry は地主としてのプライドのほうを重視する。この一件で、Keegan との関係は決裂し、一家はさらに追い詰められていく

ことになる。

このように、一家の性格が現在の苦難の一因であると描くことで、アイルランドの問題に関しても外的要因だけでなく、アイルランド自身にも原因がある、ということを示そうとしている。“[Thady] was puzzled to think whether Keegan and Ussher, or his father and Feemy, caused him most trouble and unhappiness.” (214) と述べられているように、Thady は自分の困難と不幸の原因は Keegan と Ussher, それとも父と妹どちらによるものが大きいのかを考える。このことも、アイルランド問題は外的、内的どちらの責任が大きいのかははっきりと区別できないことを示している。

後に Trollope は *Castle Richmond* という作品において、飢饉は神によるものだという考えを示している。このことに対して、「飢饉が神の行為によるものと書くことによって、イングランドの責任を軽減するだけでなく、飢饉が与えた損害の一部は、アイルランドの思慮のなさのせいにもできる」と Corbett は述べている。<sup>19</sup> 同様に、一家にも現在の貧困の問題があると書くことで、アイルランド問題に対するイングランドの責任を Trollope は減らそうとしているのではないだろうか。

このように、Trollope は一家に対して共感と拒絶の態度を示している。Trollope の相反する態度については Overton が論じている。「Trollope は読者が何を期待するであろうかと意識するときには、保守的な立場をとる傾向があるが、これと矛盾する態度が存在する」と Overton は述べている。その例の一つとして、Overton は Trollope による女性の扱いを挙げている。Trollope は女性の居場所は家庭であり、女性が政治に関わることに否定的である。作品においても、政治的影響力を手に入れるため、愛のない結婚をする女性を非難している。その一方で、女性が政治に影響力を求めようとする動機を同情的に描いている。<sup>20</sup> この例においても、彼の否定と理解という立場をみることができる。

このような立場は、Trollope の曖昧な立場も影響しているのではないだろうか。Foster はイングランド社会に適合できず、アイルランドに来た「文

化の境界に属する人物 (marginal men)』の1人として Trollope の名前を挙げている。彼らはイングランドとアイルランド両方の文化を知ることができる立場におり、アイルランドに対して相反する態度を示す、と述べている。<sup>21</sup> このような相反する態度は Trollope の一家に対する態度にも窺うことができる。アイルランドに対するふたつの相反する態度は、イングランドとアイルランドふたつの文化に接する他の人間にもみることができる。<sup>22</sup> この Trollope の立場は Thady の立場にも反映されている。

## (2) Thady と Trollope

作品において Trollope の曖昧な立場とその内面が最も反映されているのは Thady である。Foster が指摘するように、Trollope はイングランドとアイルランドふたつの文化を知る人間である。アイルランドにおける郵便職員としての仕事の中には、住民の不満を聞きに行くこともあったことから、彼は地主だけでなく、小作人階級とも接することになる。Trollope はイングランド出身でありながら、アイルランドに親しみを抱き、その地の状況をよく知る人間となっていく。結果として、Trollope はイングランド的背景を持つため、イングランドとアイルランドという、ふたつの異なる文化を心情的に理解しうる立場を持つことになった。Trollope はアイルランドの文化、現状をよく理解していた。この点において彼はアイルランド内部の人間である。しかし、イングランド出身である以上、アイルランドにとっては他者である。Trollope の曖昧な立場は Thady においても表現されている。

一家は地主と小作人に接する立場にある。Thady の場合、さらに権力と反抗という立場の間で揺れ動くことになる。Thady が Ussher や Keegn に怒りを抱くとき、彼の心は反抗的な小作人たちが参加する秘密組織である Ribbonmen<sup>23</sup> に近づく。この時、彼は地主という権力を持つ立場に在りながら、反抗的な小作人たちに共感できる立場にもいる。このように、Thady は地主という支配階級の一員でありながら、反抗的な小作人に共感することで、地主にとって他者になることもできる。しかし、いくら小作人に共感できる立

場においても、地主である以上、彼は階級的に小作人にとっては他者でしかない。

Thady の曖昧な立場は言語においても示されている。Thady は英語とアイルランド語、両方を理解することができる。「Thady のアイルランド英語は小作人より標準英語に近い」と Tracy が述べているように、言語的にも彼は支配者側に近い立場にいる。<sup>24</sup> その一方で、「通常、Thady は発音において異なるものの、標準英語を話すのが、強い感情に影響されると、農民が使う話し言葉を用いる傾向がある」と Clark が述べているように、彼は農民階級に近づくこともできる。<sup>25</sup> このように、言語面においても、彼が支配者と被支配者、イングランドとアイルランドというふたつの文化の間に位置する人間であることが示されている。

また、Thady には Trollope の、特に若い頃の Trollope の心情が反映されている。自伝において、Trollope は子供時代における貧しさ、孤独、そして青年時代における問題の多い生活について描いている。アイルランドに来る前の生活について Trollope は次のように述べている。“Could there be any escape from such dirt? I would ask myself; and I always answered that there was no escape”.<sup>26</sup> このように、ロンドンにおける Trollope の生活は、問題ばかりであったが、そこから抜け出せないでいた。

Thady の場合も、“he felt that his family was sinking lower and lower daily; but as he knew not what to do, he only became more gloomy and tyrannical.” (6) と述べられているように、一家が日々落ちぶれていくのを感じながらも、抜け出す方法がわからないでいる。「アイルランドは、変化が大多数にとって状況の悪化を意味するだけで、新しい年も希望ではなく深刻になっていく憂鬱をもたらす場所である」と Polhemus は述べている。<sup>27</sup> Thady にとっても変化は状況を悪化させるものでしかなく、絶望感は深まるばかりである。

Thady は家族、特に妹を愛しているが、その愛は報われない。このように、Thady には、孤独で、現状を変えることができない生活を送っていた頃の Trollope の姿が重ねられている。

Ussher 殺害後、Thady は Ribbonmen にかくまわれる。その時、Andy McEvoy と出会う。彼は “that lifeless but yet breathing creature” (270) と描写されているように、貧しく、無気力な生活を送っている。「Larry Macdermot, Thady Macdermot, Andy McEvoy の名前は互いに似ている」、と Gilead が述べているように、<sup>28</sup> 三人は、程度に違いこそあるものの、貧しく、無気力な生活を送っている。Thady はこのような生き方よりも John 神父のところへ行き、自首することを選択する。Thady のこの決断には、どうなるかわからないが、惨めな生活に変化をもたらすためにアイルランドへ行くことにした Trollope の姿が重なる。しかし、Thady の死後も Larry は生き残る。Larry という人物は無気力で変化のない生活を象徴し、Trollope の父とも重なる部分がある。Larry の生存は、Trollope にとって過去の自分や父の存在が簡単に消えないことを示している。

John 神父は「Trollope の保守的自由主義を象徴している」、と Johnston が述べているように、<sup>29</sup> Ribbonmen に反対する存在として描かれている。そのため、Thady が Ribbonmen から去り、神父のもとへ向かうことは、Terry が述べる「無政府状態に対する勝利」を意味すると同時に、<sup>30</sup> 法による裁きという制度を支持する Trollope の態度を示している。

また、神父には Thady への共感という Trollope の心情も反映されている。神父は、父と妹に殺人者だと非難され、拒絶された Thady を受け入れ、最後まで Thady のそばに居続ける。後の版では削除されたエピローグの部分では、Thady のことを語る John 神父の姿が描かれる。“[Thady] has utterly forgotten all his faults, and all his follies—[Father John] speaks of him as a martyr to the villainy of his enemies—as a man whose life and death were such as could only inspire love and pity; [...]” (448) と述べられているように、Thady の過去における失敗は許され、愛される存在となる。Trollope は “I acknowledge the weakness of a great desire to be loved, —of a strong wish to be popular with my associates.” と自伝において愛されたいという願いについて述べている。<sup>31</sup> その願いは最後の Thady の姿において実現されている。

ロンドンにおける Trollope の生活はアイルランドに来て改善される。1844年には結婚した。また、友人もでき、みなから親しまれる存在になっていく。Thady の立場の変化は、このような Trollope の精神的な変化も反映されているのかもしれない。このように、Thady と Trollope には共通する部分が多い。だからこそ、Trollope は Thady に共感せざるを得ない。Thady への共感が登場人物の行動を通して最も強く示されるのは、彼の処刑場面である。

自分の処刑場面を見られたくない Thady のために、John 神父は見物に行かないよう教区民たちに頼む。さらに、ほかの聖職者たちも協力し、それぞれの教区民に呼びかける。その結果、Thady の処刑を見に来るものは誰もいなかった。処刑の時間帯に店を開けるものもいなかった。また、Reynolds たちも処刑場が見える橋を封鎖し、誰も処刑を見ることができないようにする。彼らの行動には Thady への敬意が示されている。

大衆たちの行動は Thady のためという個人的なものであるが、「潜在的にはあるが、典型的な革命の象徴をみることができる」、と Johnston が指摘しているように、<sup>32</sup> 政府に対する反乱の行動と解釈することができる。Reynolds のような政府に反抗的な人間が加わることで、この行動が政府への反抗という要素を含むことになる。

Trollope はアイルランドの語りをイングランドによる編集で囲むことでアイルランドへ共感しすぎないようにしている。それにもかかわらず、処刑場面において示されているように、アイルランドへの共感が保守的な Trollope の態度を上回るものとなっている。この現象は Thady に対する Trollope の共感によるものだけでなく、作品の執筆時期も影響しているのかもしれない。この作品が出版されたのは1847年のことであるが、執筆を開始したのは1843年の9月で、完成したのは1845年の3月ことである。彼がアイルランドに来たのは1841年の9月であるから、アイルランドに来てからまだ数年しか経っていない。「若き日の Trollope はまだ彼の心の中で生きており、今も再現することができる」、と Moody が指摘するように、<sup>33</sup> 過去の孤独な生活に関する記憶は、彼の心の中にまだ鮮明に残っていたであろう。その結果、自分の

内面を反映した Thady への共感はさらに高まり、Trollope の意図を超えるほど大きくなることになる。

### (3) Feemy と Ussher の関係にみるアイルランドとイングランド

Thady は借金だけではなく、妹に関しても頭を悩ませている。Feemy と Ussher の関係には、アイルランドを自分の都合よく扱うイングランドの姿が重ねあわされている。「Ussher による Feemy の誘惑は、効果的な男性の権威がないことを示すものとして解釈できるかもしれない」と Corbett は指摘している。<sup>34</sup> 一家には “the father’s incapacity, the sister’s helplessness, and the brother’s weak authority” (49) と述べられているように、強い権力を持つ人物は存在していない。Thady は Ussher だけでなく妹に対しても強気な態度に出ることができない。そのため、Ussher が一家を訪れることを防ぐことができない。Larry は今の一家の地位なら Ussher との結婚はよいものだと思っているが、“he had not spirits enough left to be energetic on any subject.” (18) と述べられているように、意見できるほどの気力がない。男性的な権威がないのは、併合によってアイルランドが花嫁としてのイメージを持つことも関係していると考えれば、この点においても一家はアイルランドのイメージを持っていることになる。

「カトリック大衆は、地主に従えば軽蔑され、反抗すれば反抗のだと扱われるダブル・バインドにさらされている」とイーグルトンは述べている。<sup>35</sup> Ussher は従順すぎる小作人に対して軽蔑した態度をとっている。同様の状況が一家にも当てはまる。Feemy は Ussher に盲目的に従っている。彼はその態度を軽蔑し、Feemy には結婚したいと思わせるような尊敬心を抱かせるところがないと考えている。“[H]er fervent love and perfect confidence, though very gratifying to his vanity, did not inspire him with that feeling of respect which any man would wish to have for the girl he was going to marry” (155). 一方、Thady のように Ussher 殺害した場合、反乱分子として処刑される。このように、Feemy と Thady は地主階級であるが、カトリック大衆

のイメージも持つことになる。

Feemy にも Thady ほどではないが、昔の Trollope の生活が反映されている部分がある。Trollope がロンドンでの生活をはじめるとき、“no advice ever given to me”, と述べているように、彼に助言を与えてくれるものは誰もいなかった。その結果について Trollope は次のように述べている。“The temptation at any rate prevailed me. I wonder how many young men fall utterly to pieces from being turned loose into London after the same fashion. Mine, I think, was of all phases of such life the most dangerous”.<sup>36</sup> その後、Trollope のロンドンにおける生活は悪化していくことになる。適切な助言や制御がない生活の危険性については Feemy の場合にも当てはまる。そのため、Trollope は Feemy の盲目的な愛について賛同はしなくとも、彼女を完全に否定することはない。彼女の過ちを赦す態度は John 神父を通して示される。“[Father John] reflected how grievously she had expiated her folly in not listening to the advice of her friends respecting Ussher, and all his anger against her ceased” (421).

Feemy の場合、彼女の母と祖母はすでに亡くなっているため、“she was freed from the restraint and constant scolding” (41) と述べられているように、適切なしつけを受けてこなかった。また、彼女が Ussher と交流し始めた頃、“there was no one to whisper caution to Feemy” (46) と述べられているように、彼女に注意をする人間はいなかった。その後、彼女は Ussher に盲目的に恋するようになり、そのときには他人の忠告を聞かなくなっていた。

Feemy が Ussher との駆け落ちで悩むときも、彼女に積極的に関わる人間はいなかった。神父たちは下手に Ussher のことを話して彼女のプライドを傷つけてはいけないと考え、彼女をそっとしておくことにする。この態度は間違いであったことが後に判明する。“[F]or had Mrs McKeon spoken to Feemy, as she herself proposed, she would certainly have learnt the truth, for Feemy would not have had the strength to conceal it, even if she had the wish.” (208-209) と述べられているように、この時、Feemy と話していれば、駆

け落ちを阻止できた可能性が高い。Ussher との駆け落ちが、その後の Thady による Ussher の殺害と彼の処刑につながっていくのなら、彼女を孤立させるべきではなかった。適切な世話や満足な教育を受けていない彼女は、文明化されていないアイルランドのイメージをあわせ持つ。放置状態にあることが、後の問題につながっていく様子を描くことで、アイルランドには適切な指導や教育が必要であるという Trollope の考えが示されている。

「アイルランド貴族の末裔である Feemy がアングロ・サクソンの Ussher にさらわれる場面は、イングランドによるアイルランドの度重なる搾取を象徴している」、という Johnston の指摘をまつまでもなく、<sup>37</sup> Ussher にはアイルランドを搾取するイングランドの姿が重ねあわされている。併合を表す比喩として、イングランドを花婿、アイルランドを花嫁として扱うものがあるが、Trollope はイングランドのアイルランドに対する態度は妻に対する態度ではないと考えている。「Ussher への Thady による攻撃は搾取に対する攻撃を象徴しているである」、と Johnston が指摘しているように、<sup>38</sup> Thady による Ussher 殺害は個人的なものだけではなく、アイルランドを愛人扱いしようとするイングランドへの怒りを表していると言える。また、私生児である Ussher が Feemy を誘惑することでまた新たな私生児が生まれることになる。このこともアイルランドにおける負の連鎖を示している。

アイルランドを愛人として扱おうとするイングランドの比喩は、Trollope による *An Eye for an Eye* (1879) という作品においても窺うことができる。この作品においても、アイルランドの女性を愛人扱いしようとする、イングランドの人間が彼女の身内によって殺される。アイルランドを愛人ではなく、妻として扱うべきだという Trollope の主張は、*Phineas Finn* (1869) という作品においてもみることができる。<sup>39</sup> このように、Trollope はアイルランドを都合よく扱うイングランドの態度を非難するが、併合が解消されることは決して望まない。併合を維持したまま関係を改善していくことを望んでいる。この態度においても、アイルランドへの共感と保守的立場というふたつの立場をみることができる。

#### (4) 作品における地主制度

Ussher は Feemy を自分に都合よく扱うだけで、決して Feemy と結婚して彼女への責任を果たすことはない。Ussher は、駆け落ちしたら家族がどう思うか悩む Feemy の気持ちを全く考えていない。さらに、彼女の存在を重荷に感じると嫌い始める。このような彼の態度には、アイルランドを自分の都合のよいように扱うイングランドの姿が反映されているが、アイルランドに対して無責任なイングランドの姿は作品における地主たちの姿にも当てはまる。

この小説には Macdermot 家以外にも地主が登場する。ほかの地主たちは一家と異なり、プロテスタント教徒で金持ちだが、問題のある地主として描かれている。*Castle Rackrent* においても裁判を繰り返して借金を作る地主、狩りのことばかり考える地主、不在地主などが様々な問題ある地主が登場する。この点においても Edgeworth との類似点を見ることが出来る。他の地主も描くことで、アイルランドにおける地主制度の問題点について描いている。

地主制度の問題としてまず不在地主制度を挙げることができる。イーグルトンには、「十九世紀の評論家のなかには、地主たちの多くが国外にいるおかげで、その腐敗と無能さにより農夫たちを墮落させることはなくすんでいるのはありがたいことだと見なす者もいた」と述べている。<sup>40</sup> Trollope はそう考えてはいない。Edgeworth が「不在地主制度とは、知識と権力の乖離にはかならない」と考え、<sup>41</sup> 地主が自分の領土に住む小作人の状況を知らないことを問題視しているのと同様に、Trollope もまた不在地主を批判している。不在地主の存在によって起こる問題を Mohill という土地を例にして描いている。Mohill の主 Birmingham は不在地主である。Trollope は彼について次のように述べている。

In short, is not everyone aware that Lord Birmingham has spent a long and

brilliant life in acts of public and private philanthropy? [...] Yet shall no one be blamed for the misery which belonged to him; for the squalid sources of the wealth with which Poles were fed, and literary paupers clothed? (83)

彼はイングランドでは慈善家として知られているが、アイルランドにある自分の領地に一度も足を踏み入れたことがない。そのため、自分の土地とその住民がどんなにひどい状況下にあるのかについて知らない。アイルランドの土地から得る金でよい暮らしをしているのに、その土地に対して関心を示さない態度を Trollope は非難している。

地主が不在の場合、その土地を代わりに中間管理者 (agent) が管理する。その管理者が問題を起こす場合があることを Trollope は指摘している。その例は Keegan の行動にみることができる。Thady が拘留されている間、Keegan は地主権力が不在なのをいいことに、小作人たちに対して好き放題に振舞う。そのときの彼の行動は以下のように描かれている。

[Keegan] could do what he pleased with the lands, and he was not long in availing himself of the power. In January he served notices on all the tenants that unless the whole arrears were paid on or before the end of the next month, they would be ejected; [...]. (287)

このように、彼は、Brady を手先に使い、勝手に地代を取り立てて自分のものにし、地代を払うことのできない小作人は追い出す。「この見解によると、大惨事は、それ自体は良い制度、つまり地主制度の崩壊から起こる」、と Overton が述べているように、<sup>42</sup> 本来良いものである地主制度がきちんと機能していないと問題が起こる状況を Trollope は描いている。中間管理者の問題は Trollope による他のアイルランド小説、例えば *The Kellys and the O'Kellys* (1848) や *Castle Richmond* (1860) においても描かれている。*The Macdermots* では不在地主と中間管理者、両方を批判しているが、後の *Castle*

*Richmond* では不在地主より、代わりに土地を任せられる人間の方が問題であると書いている。

*Castle Rackrent* では、最終的にプロテスタント教徒で弁護士の Thady の息子が Thady の主人の土地を手に入れる。この結果に関して、イーグルトンは「墮落はしていても、改めて振り返ってみると華やかであった伝統主義に対して、新しい、仮借ない功利主義的秩序が勝利をおさめつつあることを、痛感させられるとってよいだろう」、と指摘している。<sup>43</sup> *The Macdermots* では、結局 Keegan が Ballycloran を手に入れることはできなかったが、消えつつある伝統的ゲール貴族に対する新しい階級というイーグルトンが指摘しているような状況が当てはまる。また、一家と Keegan との対立はゲール貴族と彼らから土地を奪おうとするプロテスタント系入植者たちの対立を連想させる。

不在地主によって起こされる問題を描く一方で、地主の中にはアイルランドに在住している者もいるが、そのことがアイルランドの繁栄につながるものではないことを指摘している。例えば、Jonas Brown は“an irritable, overbearing magistrate, a greedy landlord” (215) とあるように、高圧的で強欲な上、弱者に優しくない地主として描かれている。彼は Thady に対しても全く同情を示さない。彼の二人の息子は“had both been brought up to consider sport their only business” (215) と娯楽のことばかり考えていて、思いやりのある地主になることは期待できない。Mr. Brown と対照的に Mr. Webb は“a kind-hearted landlord” (293) として描かれている。しかし、彼でさえ、“with all these high qualities he was hardly the man most fit to do real good in a very poor and ignorant neighbourhood.” (293) と述べられているように、最高の地主とは描かれていない。このように、アイルランドではプロテスタント系の地主とカトリック系の小作人との間に完全な相互理解が存在していないことが示されている。

このように、Trollope はアイルランドにおける地主支配の状況を描いている。さまざまな地主像を描くことによって示されているのは、アイルランド

が適切に統治されていない状況にあるということである。多くの悪徳地主は自分たちの利益のことばかり考え、統治責任を果たそうとしていないことを Trollope は指摘している。彼らにもアイルランドに対して責任ある態度を取っていないイングランドの姿が重ねられている。このように、利益は得るが、責任を果たさない支配者たちの態度を Trollope は批判している。その一方で、彼自身、Macdermot 家のプライドにも問題があると描くことで責任を軽減しようとする態度を示している。この点においても、彼の態度における二面性をみることができる。

また、Trollope は地主や中間管理者の起こす問題を描いているが、地主制度自体には何の異議も唱えていない。この態度は生涯貫かれることになる。晩年、従来の地主制度を脅かそうとする土地戦争における動きに激しく反発している。Johnston はこの Trollope の態度を彼の保守的自由主義という政治的立場と関連させて論じている。自由主義的な Trollope は地主や権力者の圧制に怒りを抱くが、その一方で、保守的な Trollope は現在の制度や併合を崩壊させるような急激な変化を望まない、と述べている。<sup>44</sup> このような Trollope のふたつの態度は、この作品における裁判や警察権力の問題についても当てはまり、腐敗しているのは制度ではなく、それを扱う人間であるという考えを示している。

### (5) Ribbonmen に対する共感

Feemy に対する Ussher, 悪徳地主などに重ねて、アイルランドを自分の利益のために扱うだけで、その責任は取らないイングランドの姿が描かれてきた。そのような搾取や圧制に反抗する勢力として物語に登場するのが、Ribbonmen という秘密組織である。

Trollope は作品に登場する反抗的な小作人の行動について共感していないが、反抗的な態度を取る状況が存在していることを理解している。

Trollope は反抗的な小作人よりも密告や裏切り行為のほうを非難しているように思われる。このことは Thady に仕える Brady の例にみることができ

る。“That such a man as Brady is described to be should exist and find employment in a country, is a fact which must shock and disgust” (112) と述べているように、Trollope は Brady の行動を不快に思っている。“Rats always leave a fall-ing house, and Brady was a real rat.” (210) と述べられているように、Brady は、一家には未来がないと考え、Thady を裏切り、Keegan にも仕える。彼は、Thady の裁判時にも、新しい主人である Keegan の意向を受けて、Thady が Ribbonmen と陰謀を企てていたと Thady に不利な証言をする。Brady は最後にその報いを受け殺されている。Brady と Ussher は殺害され、Keegan も小作人たちによる襲撃を受けて負傷したように、Trollope が非難している人間は何らかの報いを受けている。その一方で、Reynolds たち Ribbonmen の一員である小作人たちは Thady 処刑後も生き残り、活動を続けている。このことから、少なくとも、主人を裏切った Brady よりはその存在を非難していないことになる。

そもそも Reynolds が Ribbonmen に参加した理由は、身内を不当に逮捕されたからである。「Trollope はいつも法と秩序を支持する立場にいるが、*The Macdermots* では、法の施行者が腐敗している場合があること、そのような人間が無法状態の原因になっているかもしれないということを認めている」、と Wittig は指摘している。<sup>45</sup> このように、Trollope は反乱分子に賛同していないが、法や権力が正当に機能していないことによって反乱分子が生み出される状況や、制度そのものに問題はなくとも権力を行使する人間が腐敗している場合があることを理解している。その例は Ussher の行動において示されている。

彼らが反乱を起こす原因があることを理解しているが、完全に共感することはない。「Trollope は貧しきものに同情を示しているが、急激な変化が現在の社会的、政治的構造を破壊することを恐れている。そのため、*The Macdermots* で描かれている問題には、過激な解決手段もあるかもしれないという考えを Trollope はなんとしても取り除こうとしているが、Ribbonmen の存在は明らかにそのような解決の可能性を暗示している」、と Johnston が

述べている。<sup>46</sup> このように、Trollope は現在の体制を崩壊させるような革命的な解決を望んでおらず、その態度は Reynolds たちの設定にも現れている。Reynold たちによる Keegan 襲撃や Brady 殺害は Thady のための復讐であると描くことで、彼らの行動は個人的なもので政治的なものではないことを示そうとしている。

Thady の裁判が開始される前、彼らによる Keegan 襲撃や Ussher の後任への脅迫、スパイへの報復といった行動から、政府側の人間はアイルランドの農村地域について以下のように考えるようになる。

People in the country began to say that some severe example was necessary —that the country was in a dreadful state—and that the government must be upheld; and these fears became ten times greater, when it was generally known that Thady, a day or two before the catastrophe, had absolutely associated with some of the most desparate characters in the country, [...]. (291)

このように、アイルランドの農村地域が無政府状態にあると考えた政府は、見せしめの意味も込めて Thady の裁判を厳しく行うことにする。また、Thady は Reynolds たちと話していたことから Ribbonmen の仲間だと考えられ、陪審員への印象はさらに悪くなる。反抗的な小作人たちの行動や彼らとの関わりが Thady の不利に働いていく状況を描くことで、彼らの存在は結局のところアイルランドに利益をもたらさないと Trollope の考えが示されている。

「小説は Ribbonmen を無力で計画性のない存在として表している」、と Corbett が述べているように、<sup>47</sup> 彼らを取るに足らない存在として描こうとしている。Ussher もまた彼らの存在を脅威とみなしていない。“[H]e thought the poor were cowed and frightened. He despised them too much to think they would have the spirit to rise up against him.” (140-141) と述べられているように、Ussher は彼らのことを取るに足らない存在と考えている。このよう

に、Trollope は Reynolds たちの存在感をできるだけ小さく描き、彼らが革命を起こすことができるほど大きな存在ではないことを示そうとしている。また、彼らの目的は、Ussher を追い出すことと小作人の不当な追い出しを阻止することで、特にアイルランド独立や革命といった革命的な目標までは持っていない、と描くことで、政治色を薄くしようとしている。

物語では、地主による統治の失敗、Keegan と Macdermot 家の対立、Ussher と小作人の対立など様々な形で、プロテスタント系のアングロ・アイリッシュとカトリック系のアイルランドの対立が描かれてきた。サッカレー (William Makepeace Thackeray 1811-63) は『アイリッシュ・スケッチブック』(*The Irish Sketch Book* 1842) において、アイルランドには、カトリックとプロテスタント、二つの真実が存在している、と述べている。“To have “an opinion about Ireland,” one must begin by getting at the truth; and where is it to be had in the country? Or rather, there are two truths, the Catholic truth and the Protestant truth. The two parties do not see things with the same eyes” (343). Thady の裁判においても、プロテスタント教徒とカトリック教徒、というふたつの価値観が争うことになる。個人的な殺人であると証明しようとするカトリック教徒と政治的な殺人だと考えるプロテスタント教徒、というふたつの態度がこの裁判では示されている。

「Ussher をイギリスに使える警官に設定することで、彼による Feemy の誘惑と彼の死は政治的な意味を持つことになる」、と Tracy が指摘しているように、<sup>48</sup> プロテスタント系の地主たちにとって、Thady の殺人は妹を守るものではなく、権威に対する政治的反抗でしかなかった。裁判では、地主であるが、カトリック教徒であるという Thady の立場も関係してくる。Corbett が「Thady は内部から地主の権威を傷つけようとしていると判断された」、と述べているように、<sup>49</sup> 事情を詳しく知らないため陪審員たちは、Thady が同じカトリック教徒の秘密結社と組んで権力に対して反乱を企てたと考え、恐怖にかられる。プロテスタント系地主の Brown は、Thady が地主の息子であるという事実は殺人を10倍悪くしていると考えている (293)。

「アセンダンシーはイングランドが自分たちの権限集中を解体しようとしているのではという恐怖にとらわれていた」, と Foster は指摘している。<sup>50</sup> 自分たちの地位を脅かされるのではないかという恐怖は Thady による殺人に対する態度にも表れている。裁判はプロテスタント教徒の信じる真実で終わりを告げる。

[the judge] stated his own conviction that the verdict was a just and true one; alluded to the irreparable injury such illegal societies as that to which the prisoner too evidently belonged, must do in the country; assured him that he had no hope for mercy to look for in this world [...]. (433)

Thady による個人的な殺人は政治的反乱とみなされ、社会の秩序を守るため彼は処刑されることになる。陪審員たちは、Brady による偽証を信じ、真実を追究することはない。このように、アングロ・アイリッシュに都合のよい結果を出すために法制度が用いられている状況が描かれている。「物語の登場人物に起こることは、アイルランドが事実上イギリスの植民地であるという事実に原因がある」, と Polhemus は指摘している。<sup>51</sup> Thady の殺人が政治的な反抗と考えられたのも、併合が存在しているからといえる。問題があるのは制度ではなく、権力を持つ人間の腐敗である、と描くことで、政府や併合の責任については触れていない。Trollope 自身は併合自体に疑問を示しておらず、イングランドとの併合はアイルランドの利益になる、と考えている。この考えは生涯変化することはなかった。

## お わ り に

これまで、Trollope がアイルランドにおける問題とイングランドとアイルランドの関係をどのように描写しているのか、Trollope がどれだけ Thady に共感しているのかについてみてきた。Trollope はアイルランドの語りを、イングランドによる編集で囲むことで、アイルランドに共感しすぎないように

に、バランスをとろうとした。それは、彼のアイルランドへの共感と保守的なイングランド人的視点においても示されている。しかし、Thady の処刑場面にみることができるように、最終的にアイルランドに強く共感した話になっている。このことから、アイルランドへの共感に対するイングランドの制御は完全ではないことがわかる。語りの構造における制御の失敗はアイルランドにおけるイングランドの統治の失敗のイメージと重なる。

エピローグにおいて、一人生き残った Larry の姿が描かれる。“He often asks after Feemy and Ussher, wondering when they will come back, and seeming to expect that he is only waiting for their return to take possession of Ballycloran again [...]” (445). このように、Larry は Ussher と Feemy がいつの日か戻ってきて、再び Ballycloran を所有することを夢見る。もし二人が共に土地を所有することになれば、プロテスタント・アングロ・アイリッシュとカトリック・ゲールという二つの相反する立場の融合が成し遂げられることになる。だが、二人とも亡くなっている以上、その夢はかなうものではなかった。このことから、ふたつの立場は相容れないものである、と Trollope が感じていることが窺える。両者が相容れない関係にあることは、作品における、警察官と小作人の対立やプロテスタント系地主の姿においても示されている。

この作品で示されているアイルランドへの共感とイングランド人的視点という二重性は Trollope による他のアイルランドを舞台とした作品においても重要な要素であり、Trollope の核となっている。

注

1. *Autobiography* (以下 *Auto*) 75
2. *Auto* 70
3. Tracy Introduction xxvii
4. Terry “Three Lost Chapters” 77
5. Smalley 546
6. Smalley 548

7. Smalley 549

8. Sir William Gregory (1817-92)

国会議員 (for Dublin 1842-7, for Galway 1857-71)。彼の妻 Lady Isabella Augusta Gregory (1852-1939) はアイルランド文芸復興運動の中心人物であった。

彼は Trollope と同じハロー校 (Harrow) 出身であるが、交流が始まったのは Trollope が仕事でアイルランドに赴いてからとなる。彼の屋敷である Coole Park において、Trollope はアイルランド作家や地主たちと知り合うことになる。(Connolly 240 Terry Trollope Companion 225)

9. Escott 61

10. Isaac Butt (1813-79)

法律家。Dublin University Magazine (1834) 設立者の1人。自治運動を推進していく。

1849年、Trollope は裁判で証言することになるが、そのとき反対尋問を行ったのが Butt である。この時、Butt は自分の有利な展開に持ち込むため、Trollope を動揺させようと *The Macdermots* について言及する。(Terry Trollope Companion 76) 以下がそのやり取りである。

Mr Butt: Do you know *The Macdermots of Ballycloran* (laughter).

Mr Trollope: I know of a book of that name.

Mr Butt: Do you remember the barrister of the name of Allwind (laughter)?

Mr Trollope: I do.

Mr Butt: And another name O'Napper.

Mr Trollope: Yes.

Mr Butt: I believe in drawing that character, it was your intention to favour the world with the beau ideal of a good cross-examiner?

Mr Trollope: Yes. I dreamed of you (loud laughter).

(Terry. *Trollope Interviews and Recollections* 43-44)

「作品への言及が笑いを引き起こしていることから、その場で作品について知っているのは Butt だけではなかったと」、Edwards が指摘しているように、Trollope が *The Macdermots* を執筆したことはアイルランドにおいてある程度は知られていたことになる (Introduction vii)。

11. Johnston 76-77
12. Tracy “The Unnatural Ruin”
13. イーグルトン 285
14. Tracy “The Unnatural Ruin” 365
15. イーグルトン 281
16. Cronin 17
17. Tracy Introduction xiv
18. Overton 18
19. Corbett 129
20. Overton 1-8
21. Foster *Paddy & Mr. Punch* 14章 Marginal Men and Micks on the Make: The Uses of Irish Exile, c. 1840-1922 参考
22. 例えば、この相反する態度の古い例としてスペンサー (Edmund Spenser 1552-1599) を挙げることができる。彼は反抗的なアイルランド人やアイルランドの古い習慣に不快感を示している、武力を用いても根絶やしにするべきだ、という過激な発言をしている。その一方で、美しいキルコルマン (Kilcolman) の風景を理想郷 (Arcadia) とみなしていた。
23. Ribbonmen  
カトリックの秘密組織。その名が初めて言及されたのは1811年のことで、19世紀の大半、公式犯罪報告書などにおいて繰り返し登場する。Tracy は、「1830年代にはすでに時代遅れの用語となっていた。Ribbonmen の存在がいつでも民族的・政治的運動であったかは疑わしい」、と述べている (Intro xvi)。そのため、大衆的な民族主義的政治活動の発達における過渡期とみることができる。(Oxford Companion 512)
24. Tracy Introduction xxi
25. Clark 102-103
26. *Auto* 52
27. Polhemus 16
28. Gilead 24
29. Johnston 91
30. Terry *Artist* 185
31. *Auto* 60
32. Johnston 89

33. Moody 13-14
34. Corbett 124
35. イーグルトン 289
36. *Auto* 51
37. Johnston 86

Corbett もまた、多くの批評家が、Ussher による Feemy に対する誘惑を、イングランド・アイルランドの植民地関係のアレゴリーとして解釈することは意外ではない、と述べている。(124)

Tracy は、イングランドに虐げられる無力なアイルランドを象徴する、Kathleen ni Houlihan や Dark Rosaleen といった女性のように Feemy もまたイングランドによって犠牲にされる、と述べている。(Ruin 360, Intro xv)

38. Johnston 86
39. *Phineas Finn* において、Trollope は併合を維持するならば、アイルランドを愛人としてではなく、妻として扱うべきだ、と次のように述べている。

“Let her at least not be a kept mistress. Let it be bone of my bone and flesh of my flesh, if we are to live together in the married state (2: 180)”.

40. イーグルトン 113-114
41. *Ibid.* 297
42. Overton 19
43. イーグルトン 284
44. Johnston 72-81
45. Wittig 112
46. Johnston 81
47. Corbett 126
48. Tracy Introduction xv
49. Corbett 122
50. Foster *Modern Ireland* 173
51. Polhemus 16

#### Works Cited

Clark, John W. *The Language and Style of Anthony Trollope*. London: Andre Deutsch, 1975.

Connolly, S. J. Ed. *The Oxford Companion to Irish History*. second edition New York:

- Oxford UP, 2004.
- Corbett, Mary Jean. *Allegories of Union in Irish and English writing, 1790-1870: Politics, History, and the Family from Edgeworth to Arnold*. Cambridge: Cambridge UP, 2000.
- Cronin, John. "Trollope and the Matter of Ireland." *Anthony Trollope*. Ed. Tony Bsreham. Totowa, NJ: Barnes & Noble, 1980. 13-35.
- Edwards, Owen Dudley. Introduction. *The Macdermots of Ballycloran*. By Anthony Trollope. London: Published by Omunium Publishing for The Trollope Society, 1991. v-xlvi.
- Escott, T.H.S. *Anthony Trollope: His Public Services Private Friends and Literary Originals*. Honolulu: UP of the Pacific, 2004.
- Foster, R. F. *Modern Ireland, 1600-1972*. London: Penguin, 1989.
- . *Paddy & Mr. Punch: Connection in Irish and English History*. Harmondsworth, Middlesex: Penguin, 1995.
- Gilead, Sarah. "Trollope's Ground of Meaning: *The Macdermots of Ballycloran*." *The Victorian Newsletter* 69 (1986): 23-26.
- Hall, N. John Ed. *The Letters of Anthony Trollope*. Stanford, Calif.: Stanford UP, 1983.
- Johnston, Conor. "The Macdermots of Ballycloran: Trollope as Conservative-Liberal." *Eire-Ireland: A Journal of Irish Studies* 16 (1981): 71-92.
- Moody, Ellen. *Trollope on the Net*. London: Hambledon Press, 1999
- Overton, Bill. *The Unofficial Trollope*. Harvester Press, Barnes & Noble Books, 1982
- Polhemus, Robert M. *The Changing World of Anthony Trollope*. Berkeley: U of California P, 1968.
- Smalley, Donald Ed. *Trollope: The Critical Heritage*. London: Routledge & K. Paul New York: Barnes & Nobles, 1985.
- Terry, R. C. Ed. *Trollope: Interviews and Recollections*. Basingstoke: Macmillan Press, 1987.
- . Ed. *Oxford Reader's Companion to Trollope*. 1999. New York: Oxford UP, 2001.
- . "Three Lost Chapters of Trollope's First Novel." *Nineteenth-Century Fiction* 27 (1972): 71-80.
- . *Anthony Trollope: The Artist in Hiding*. London: Macmillan Press, 1977.
- Thackeray, W. M. *The Irish Sketch Book and Notes of a Journey from Cornhill to Grand Cairo with Illustrations by the Author*. London: Smith, Eider, 1869.

- Tracy, Robert. "The Unnatural Ruin' Trollope and Nineteenth-Century Irish Fiction." *Nineteenth-Century Fiction* 37 (1982): 358-382.
- . Introduction. *The Macdermots of Ballycloran*. By Anthony Trollope. Oxford; New York: Oxford UP, 1991. vii-xxviii.
- Trollope, Anthony. *An Autobiography*. Ed. Michael Sadleir and Frederick Page. New York: Oxford UP, 1999.
- . *The Macdermots of Ballycloran*. Ed. David Skilton. London: Published by Omunium Publishing for The Trollope Society, 1991.
- , *Phineas Finn*. Ed. Jacques Berthoud. New York: Oxford UP, 1999.
- Wittig, Ellen W. "Trollope's Irish Fiction." *Eire-Ireland: A Journal of Irish Studies* 9 (1974): 97-118.
- テリー・イーグルトン『表象のアイランド』鈴木聡訳 紀伊国屋書店、1997年。  
マライア・エッジワース『ラックレント城』大嶋磨起、大嶋浩訳 開文社出版、2001年。

## Two Viewpoints in Anthony Trollope's *The Macdermots of Ballycloran*

FUJII, Ayako

*The Macdermots of Ballycloran* (1847) is the first novel written by Anthony Trollope (1815–82). An English outsider writes the story, but the tale of the Macdermots was first told to him by a Catholic Irishman. By transcribing the Irish tale, the English writer has control over the narrative of the Irish. These two viewpoints are an important element of the novel. In this paper, I will discuss how Trollope's dual attitudes are represented in this novel.

This is the story about the downfall of the family Macdermots. Trollope thinks that Ireland is misgoverned by England. His view is symbolized in the oppression of the poor by dishonest landlords and Ussher's seduction of Feemy. Trollope compares the miserable life of the family to an Ireland that is unjustly treated by England. While Trollope sympathetically describes the miserable life of the family and indicates that some of the problems in Ireland are caused by England, he never approves of breaking the Union between Ireland and England and fixes the responsibility of problems to some extent upon the character of the Irish. Thus, the conflict between his sympathy for Ireland and his conservative view is shown in the story.

As Trollope says in his *Autobiography*, he had lived a life full of misery and loneliness since his childhood. His life improved after he went to Ireland at the age of 26. He became an Englishman who knew Ireland well. Though he adapted himself to the Irish community, he remained an outsider because of his Englishness.

Young Trollope's miserable life and his ambiguous position are reflected in Thady Macdermot, the hero of the novel. He is a son of an Irish Catholic landlord though he practices a different religion than the other landlords. Though his family is as poor as his tenants, they are separated by the class system.

Thady is deeply troubled by the attention given his sister Feemy by Captain

Ussher, who is a Protestant and a police officer in the service of the English. While she waits for Ussher to elope with her, she faints. When Thady sees Ussher dragging the unconscious Feemy, he beats Ussher to death, believing that Ussher is abducting his sister against her will. Thady is convicted and publicly executed as a political assassin because the jury considers Thady's act as premeditated murder with a political motive.

On the day of his execution, no one appears at the scaffold and shops remain closed because Father John, a parish priest and other Catholic priests asked their parishioners to abstain. In this scene, Trollope's sympathy toward Thady surpasses his own conservatism, and he fails to control his emotion because of his compassion for Thady.

Trollope's two diverse points of view are an essential component of himself, especially in his Irish novel.